

腹腔鏡内視鏡 合同手術研究会

Laparoscopic Endoscopic Cooperative Surgery
第18回 2018年10月31日

■ 3-JP	当院における大腸腫瘍に対する腹腔鏡内視鏡合同手術(Laparoscopic Cooperative surgery-colorectal; LECS-CR) の治療成績 Outcomes of LECS-CR procedure for colorectal tumors
--------	---

代表演者：安江千尋（がん研有明病院内視鏡診療部）

Speaker: Chihiro Yasue, M.D., Endoscopic Division, Cancer Institute Hospital, Japanese Foundation for Cancer Research, Tokyo, Japan

共同演者：

[がん研有明病院内視鏡診療部] 井出大資、千野晶子、為我井芳郎、斎藤彰一、五十嵐正広、藤崎順子

[がん研有明病院消化器外科] 山口智弘、長寄寿矢、藤本佳也、秋吉高志、小西毅、長山聡、福長洋介、上野雅資

【背景・目的】近年大腸ESDが一般化し多施設で行われているが、ESD困難症例も存在する。我々はESD困難症例に対し、より低侵襲化を目指した腹腔鏡内視鏡合同手術（LECS-CR）を行ってきた。当院のLECS-CRの治療成績について報告する。

【対象・方法】2011年12月から2018年9月の間、当院でLECS-CRを施行した17症例（男12例、女5例、平均年齢63.6歳）の治療成績を検討した。LECS-CRの適応は、①内視鏡治療後の遺残再発病変など広範で強固な線維化が示唆される腺腫・粘膜内癌、②憩室や虫垂内進展を伴った腺腫・粘膜内癌、③粘膜下腫瘍と診断した症例とした。

【結果】部位の内訳はIleum:1例、C:7例、A:4例、T:3例、D:1例、Ra:1例で右側結腸に多かった。形態は表面型12例、隆起型2例、SMT3例、病理診断は粘膜内癌5例、腺腫7例、SSA/P2例、NET(G1)1例、Schwannoma1例、Lipoma1例で、完全一括切除率17/17(100%)と良好であった。適応理由は内視鏡治療後遺残再発5例、虫垂内進展6例、憩室併存3例、SMT3例であった。術後炎症反応は軽微で出血・狭窄・縫合不全等の偶発症はなかった。術後在院日数（中央値）は6日（4-12）、平均19.4か月（1-60）の追跡期間で遺残再発は認めていない。

【結語】LECS-CRはESD困難症例に対して低侵襲かつ安全確実に一括切除できる有用な方法と考えられた。